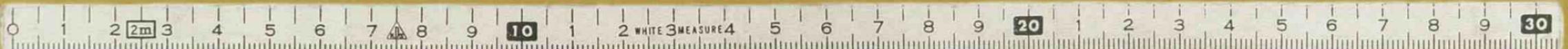


名五子と云坊間ロゲ又アニリ子青アニリ
 子紫芋^{何れ}何れも鮮美の画
 料ありアニリ子の紫式化學書中詳ふれ
 他日釋ゆ^云一^は又云へるや藍靛石腦
 油又石炭より之を製するを得べし
 此方考へ行くと^云するらば裨益少く^云さ
 べし

○地中海のジブラルタル^{コロンビウス}に建る^{コロンビウス}倫波

の像并に碑文の話

イスパニヤ人モンギルレスと云ふ者地中海の
 ジブラルタル峽^{コロンビウス}に倫波の像を安置し^云不
 朽の
 盛業を後世に傳へんと^云其肖像地球の形
 を造りて其上に立^云免括を西方に指し是れ
 可倫波創見の亞墨利加の方を指すの意あり
 其彫成色日^云在るべし^云費用数千金あり
 と^云ふ



按コロンビウスの墓碣をイスパニヤのセウ
リヤ部内に在り碑文ハ主國語を以て記を
之を譯すとる其左の如し

維可倫波

惠貽新邦

于加德拉

及亞拉岡

カステリイ及ムアラゴンを皆古の王國の名

あり初文明元年一千四百
六十九年アラゴン王ジョワ

ニ世の世子ヘルヂナンドカステリイ王へ

シリイ四世の妹イサベルラ又婚其後文明

六年一千四百
七十四年イサベルラ其兄の位を嗣ぎて

カステリイの女王となりヘルヂナンドを文

明十一年一千四百
十九年より父の位を嗣ぎ

アラゴン王となり改めてヘルヂナンド二世

と稱は是よりカステリイアラゴンの二國

合して一とあり後改めてイス
パニヤと号す是を恰もコロ

ンビウス航海の志を發せり頃ありコロンビウス

嘉吉二年 一千四百
 又生れ明應元年 一千
 九十年 亞墨利加を創見し 永正三年 一千五百
 月廿日又没し 或書云コロンビウス 一千四百五十九年
 あり 尚近日刊りたる西洋王代一覽
 扱てコロンビウスの傳記を知るべし

明治己巳 官許 毎月 刊行

西洋雜誌 卷六

東京開物社

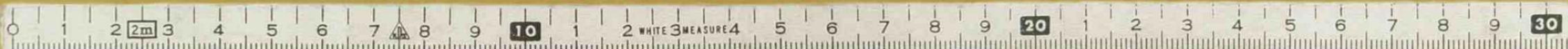
西洋雜誌

即此日、官指、所下、世民

續刺西洋雜誌小引

余嘗と社友の譯稿を纂修し、みは
うらのをト併録し、十餘卷を以て
至よりて毎月一冊を刊出、一季と續
刻をむと期す、予事、多の事、其て第
五卷より、中、後、より、一季と、う、好、お
と、見、ひ、を、は、つ、ら、と、一、季、と、一、冊、を
病、て、い、ま、ら、う、は、一、冊、を、一、冊、に、お、し、る

續刺西洋雜誌小引



とくおとし起し、業を止むべきあり
ありき近き漸く快復し且燈火
親むしお時年よりぬきは第六の巻
より彫けりしは後とては憚
急トありきしん
明治二年八月西洋雜誌編輯社
社長松園外史春彦志るる

西洋雜誌卷六 明治二年己巳九月

東京 開物社 集譯

欧羅巴^{エウロパ}近代の沿革

玄ル一千八百十九年の頃よりハ帝國二、王國
十二、大公國七、公國十三、侯國十二、エレクトル
公^{公選りたる任}侯^も爵^もの國一、教王の國一、シルタの國一、
合衆政治の國八ありて通計 五十九ヶ國

今一千八百六十九年よりして
二十季の間は變じり四十一ヶ國とあり
即ち左の如し

帝國三 奧地利 フランス 佛業西 魯西亞

○フランスハ王國ありしより嘉永五年以来

帝國とあり

王國十三 巴華里 へ白耳義 比利時

○ベルギーハ和榮の一部ありしより天保

二年独立王國とあり

丁抹 英吉利 希臘 意大利

○ギリシヤハ久しくトルコの領地とありしが

文政の初より國人一揆を起しトルコと

戦ふこと数年よりて文政十年獨立せ

王國とあり

○イタリヤハ元王國サルヂニヤシシリト大公

トスカニ公モリカモデナパルマ侯モナコ合

流部「サン、マリノ」并子教王領「ローマ」及び
 「オ、ストリヤ」の領地の熱名あり安政六年
 「サルヂニヤ」王「ヒクトル、イマニウル」兵を起し
 隣邦を并吞し時の豪傑「ガリバルチ」是
 を助け終「シ、リ」以下七國を合せ
 文久元年「イマニウル」を奉じ以「イタリヤ」
 領の王と成「ロ、マ」の地ハ敢て侵犯を
 する事なき

オランダ

和葉

葡萄牙

普魯社

薩克ソニ

西班牙

瑞典及那

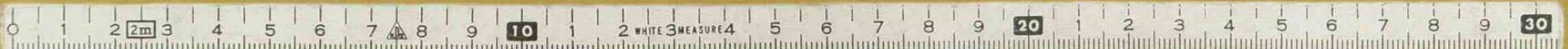
瓦敦堡

○孝藩

子「オ、ストリヤ」と戦ひて大に
 これに勝ち「オ、ストリヤ」の地を割りしめ
 尚且王「ハノ、フ」公「アナルト、ベルンブルグ」
 「アナルト、ケーテン」
 「オツサウ」
 「サクセ、ゴッタ」
 「サクセ」

ヒルドブルグホウセン 侯國「ヘスセ、ホムブルグ」「ホー
 ソレルン、ヘミンゲン」「ホトヘンソレルン、シグマリゲン」公
 選侯爵の玉「ヘッセル、カッセル」合流部「フランク
 ホルト」等の諸國を併せ、嚴格に一大
 強國となり北日耳曼の盟主となり
 大公國六 巴丁 黑西達摩斯達
 梅吟後堡、斯乘零 梅吟後堡、斯達勃
 病救堡 撒遜威塞

公國五 安合、德驛 不命瑞克 撒遜、亞丁堡
 撒遜、各堡 撒遜、梅淋認
 侯玉八 列敦士丁 里界、徒摩的
 留斯、吟勒斯 留斯、給拉
 燒向堡、里界 斯瓜斯堡、慶徒斯達
 斯瓜斯堡、孫治沙森 襪尔位
 教王國一 羅馬
 速魯壇國一 土耳其
 土耳其



合衆國ニ 不來梅 翰堡 律北克

瑞士

○以外合衆國アンドラハ佛蘭西ニ屬シカ
ラカウハ波蘭ニ入り

地中海のヨニセ島ハ希臘領ニ屬ス

○本字家リニウス先生略傳

カール、リニウス 西曆一千七百〇七

年我室曆四年 瑞丁國ニ生ズ

八年我安永七年没以古今に通ズ世ヲ
知らざるものなき格物学の大家リ其特
ニ植物本草に學を以テ著明ナリ其幼年
の頃ニ貧シク學問を志スルニ長父ハ勝
多ク其性質敏捷アリトシテ勉勵を以テ
急ニ時を争ヒテ依テ早く名を成セリ
其五歳の時ラフランドニ格學ニ始メ
フロスラハラフランドニ花草の記

卷六

五

是よりして世に初めて知らしむることを成し
それより極致の諸科を精研し「レイ
デ」の学校に在りて當時有名の諸先生
を友とて學の進むこと益速く終は本
学全書を著し「草木の花蟲を以て廿四
綱の種属を命じ後學の規範と爲し其
後英佛法を以て傳へて終は「ストックホルム
」に歸り「ウプサラ」の地に於て醫學の大教師

を任じり

○「シーボルト」氏の略傳

目耳曼^{ゼルマン}「シーボルト」氏ある内外医術に名ある
醫士其家族に多くこれあり就中「ヒルツ、
フランクス、ラン、シーボルト」を「ウルツブルグ」といふ地
の學校に於て「ヒシオロジ」^{旧人身究理學}と「^{生理學}」の學を
人身に限らずあらゆる學の學士を任じ
生物生活の理を講ずる學の
七百九十八年没せし「^{シヨウ、ゼオルジキ}

○卷六

六

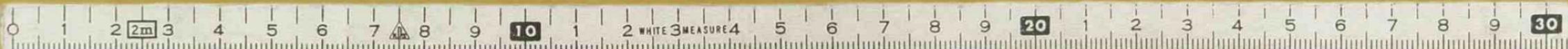
リストホ、^リンシーボルトの子として千七百九十
十六年、即我憲政八年に生れ、少年より
て学校に入りて、医学及理学を學び、文政五
年、和榮の陸軍医師となりて、東印度に
兵隊を加わりて、^{ジャワ}瓜哇島に來り、翌年物産
學研究の爲に和榮使節に隨ひて日本
に來り、天保元年、暹羅の間、日本産
物言及及び、^{ジャバ}東方法國に草木多類

森魚誌品を以て其名状を記載し

以間、日本人從遊し、^ニ醫術本草學を
を學び、^ニもの如く、^ニ殊に本草學に
専ら弟子となりて、師の著述を助々
と、伊藤圭介ありと云

和榮に歸りて、後「イデシ」は博物園を開
き、和榮の著し、日本の風土言
語物産の事を記す、^ニ考、時西洋より

長崎



評はよく日本の内地より外玉人を入る
ことなき故に西洋に於ては日本の事
情を知りし由なき一三哲は記載し因
る粗風土物産の大略を知べきの事と云
つりは三哲と云ふケムフル「五ニブルク」及び
「シーボルト」を云ふ其後「シーボルト」を和蘭領
印度の兵隊を指揮する官を勤めり
弘化の末に職を辞し「隠居」安政年中

再び日本に官遊し西返の後巴威里國の
「コロ子ル」官に進み其後三年十一月病没
きり没後巴威里政府へ「シーボルト」所持の
「アビヤ」細亞東方諸島を買上げ博物館
を開き「シーボルト」を「エセウム」と名づく
其後大凡一萬七千五百餘金ありし
内物日本に書籍貨幣武器佛像等
を日本政府に禁令ありて多量に外國

けしおの白粉を以て消酸「ビスモット」
それを業舗に賣る医家これを用ふる
必嘔吐を散一服するに堪へば
吐を散せざるも鎮痙の功を以て吾これを
聞て始りて疑を散一母にいとゆる伊藤
白目粉粒を分析し試するに皆「アンチモ
ニ」の一種なり「ビスモット」はあつて其
確證をいふに伊藤白目の溶液に硫化水素

を通じれば橙黄色或ハ赤を帯びる橙
黄色の塵を生じ是即ち金硫黄ありは
一證を以て「アンチモニ」なるを決すべし
「ビスモット」を硫化水素に逢く褐黑色又ハ
黑色の塵を生ずべし吾今先哲の誤
を指摘するに快くもばつて人命
に關係する医薬の事あるは黙止する
ことありしを記し以て普く世上に

物産の學子依る業物の異同を辨へ
化學の拙る審判の精粗を偽を鑒
識するを知らず而後始めて療病之
術を言ふべきのみ

○西洋酒史

原中葉國故事談より抄出
全部を譯せり三四十冊は多
し及ぶ一仍る近日其
要を撮る上本せんとい

嶽霞仙史譯

人は集會し飲食を共し以て親睦此

意を表すこといづれの時より始まり
とつて之を知らず昔も今も何れ例
るべし飲食といつての中にも宴會の歡
酒を存り西洋の古き獸を殺し神を
祭ることもありしは酒を飲み且これを
地に澆ぐを禮とせり而して各國の風俗
異なりといつても酒を勸めて歡を尽し
るは一轍なり昔ハタヒヤ人

和景人

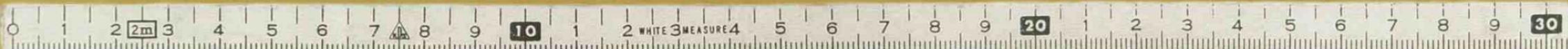
は祖先

も

ルマニヤ人も皆好んで強き酒を飲み酔倒
し礼を失ふも恥とせしむるも多し其を
世より見るまで法國皆強き酒を飲み文明開化
漸く進むに随ひ酔倒し人事を省
ぎ或は酒狂を爲し闘争訶論を爲す
の類を以て上りなき耻辱と相戒め
自ら慎む事と成ぬを人々對し
礼を失ふも過飲に因り腸胃を損害
穢れ此病を生ずるなり其實亦淺く
福を以て佛業西和業米利堅其他
の諸邦より節飲會社又禁酒會社
と稱する社中を結ぶるは其の
情を漸く過飲の酒失ある人を勸め
飲量を減せしめ又其社中より人を抱
へ置き常々市中を巡行させ市中
酔倒ししものありしを扶けて其

卷六

十三



家子送り存け 酒店料理屋家子 醉
其れ白論を命 迷惑ある 根を 是れハ
其中子 立入り 取扱ひを 命 事 あり 是
おのれきハ 実子 開化乃 確徴 あり 其 人
よ おきて 莫大の 善根 あり 是れ

才二号 嗣刻

西洋雜誌卷六終

明治二年己巳十月十日

官許

東京開物社藏板

書肆

本町四丁目
中外堂發兌



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵

